

ユダヤ人ディアスポラと仮想の記憶 Caryl Phillipsの「より高い土地を求めて」論

加 藤 恒 彦

はじめに

「より高い土地を求めて」(以下「より高い土地」)(*'Higher Ground'*)¹⁾はキャリル・フィリップス(Caryl Phillips, 1958-)の『より高い土地を求めて』(*Higher Ground*, 1989)²⁾の第三部を成す中篇小説である。「より高い土地」はフィリップスのユダヤ人ディアスポラを扱った最初の作品であり、それは後の『血の性質』³⁾(*The Nature of Blood*, 1997)において大きく開花することになる。黒人のフィリップスが何故ユダヤ人体験を描くことになったのか、その事情は『ヨーロッパ部族』⁴⁾(*The European Tribe*, 1987)の次のような部分に窺うことができる。

右翼の人間にとって(そして中道と左翼の一部のものにとってもだが)ユダヤ人は未だにヨーロッパのニガーである。わたしはホロコーストへの言及があるたびに未だに罪の意識で身震いするヨーロッパで育った。・・・ナチによるユダヤ人迫害は学校で教えられ、大学で論じられ、ヨーロッパの教育の一部である。わたしに敵意をむき出しにする国にすんでいた子供の頃、ユダヤ人は搾取や人種主義との関連で論じられた唯一の少数民族集団であり、当然のことながらわたしは彼らと一体化した。血にまみれた植民地主義の行き過ぎた行為、近代アフリカの篡奪、新大陸への1,100万人の移送、そしてその後の隷属は学校のカリキュラムでは教えられず、テレビの画面に映ることもなかった。その結果、想像のなかでわたしは自分の心の痛みや不満をユダヤ人の体験を通して体験した。(p.53 - 54)

この引用の前半部分ではヨーロッパにおけるユダヤ人問題がアメリカとはまた違った特殊な歴史的・文化的コンテクストをもっていることが示唆されている。ヨーロッパで生活するアメリカ黒人作家がユダヤ人への差別にたいして示す一種の鈍感さをヨーロッパに育ったフィリッ

ブスは敏感に感じ取りその原因を他のエッセイのなかで論じ、アメリカでのユダヤ人と黒人との歴史的な出会いの違いに求めている⁵⁾。

またこの引用の後半部分には、ユダヤ人への差別や迫害が、イギリスにおけるカリブ出身の黒人への差別や迫害を意識していたフィリップスにとって、黒人への差別が公共の場で教えられ、議論されることがない状況のもとで、黒人としての自分の体験の代理でもあったことが示唆されている。だからフィリップスはユダヤ人体験に一体化し、それを語ることによって自分の体験を語ったのである。これがフィリップスにとって自然な心の動きであったことは彼が14才の時、学校での作文でナチスドイツのもとでのあるユダヤ人の少年の逃亡体験をフィクションとして描いたというエピソードによっても知ることができる⁶⁾。

「より高い土地」はユダヤ人体験を扱ったフィリップスの最初の作品だという意味は、この作品が自己完結的ではないということを含んでいる。いいかえれば、この作品は間テクニ的に『血の性質』と深い関係を持っており、それによってある意味では支えられているということである。後に見るように、「より高い土地」のなかではいわば空白となっている部分、主人公の直接の体験というよりは想像によって補われ、それゆえ主人公の家族との記憶をより一層耐え難いものにしていく部分があり、それは『血の性質』によって初めて真正面にすえられるのであるが、ナチスのもとでのユダヤ人収容所体験である。「より高い土地」の主人公が間一髪まぬがれた収容所体験は、残された家族を襲ったものであるだけにイギリスで生きのびる彼女の人生を一層強く捉えて放さなかったのである。しかしこの作品においてフィリップスは収容体験を示唆するにとどめ、読者の知識と想像力にまかせる道を選んだのである。

「より高い土地」のテーマはある意味でこの逃れがたく、耐え難い仮想の記憶との闘いである。それに捉われる限りイレーンが現実を生き抜くことができなかつたのである。だがイギリスでの現実はその仮想の記憶をイレーンがさがりつく唯一のものにしてしまう。それは何故なのかがこの小論が明らかにするひとつの課題である。そして仮想の記憶からの解放はどのようにすれば可能であったのかの手がかりも同時にそこに含まれているのであり、それは何なのかを明らかにすることもこの小論の課題である。

作品の背景

「より高い土地」の背景となっているのは1939年9月1日のドイツのポーランド侵攻と第二次世界大戦の勃発、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義の台頭とナチスによるユダヤ人迫害、そして戦後のカリブからイギリスへの移民の開始にわたる時期である。主人公はポーランド生まれのユダヤ人女性であり、18歳の時にポーランドを逃れイギリスに渡る。そこには家族の離散があり、直接には描かれていないがポーランドに残された家族のユダヤ人収容所での悲惨な

死の物語がある。「より高い土地」は家族から離れただ一人生き残った主人公が孤独と喪失感に捉われる物語であり、第一部の「内奥の地」とも共通している。

『内奥の地』との関係

「内奥の地」との共通性はそれにとどまらない。祖国喪失というモチーフがそれである。「内奥の地」の主人公が最後にアフリカから連れ去られアメリカの競売所に立つのと同様に、「より高い土地」では主人公は生まれ育ったポーランドから逃亡し、イギリスに向かうのである。

だが、「内奥の地」の主人公が、孤独と喪失感を克服し愛と自己尊厳に至るなかで悲劇というクライマックスを向かえるのにたいし、「より高い土地」では孤独と喪失感からの出口の模索が主人公の孤独と喪失感を一層強めるアンティ・クライマックスに終わっているという点で対照的である。

また、二つの作品には共通に「家族離散の物語」が存在するがその扱いが大きく異なっている。「内奥の土地」では「家族」は忘れさられた過去として触れられるに過ぎないが、「より高い土地」では家族からの離散とその後の家族の運命への想像は主人公の心のなかで中心的なトラウマとなりイギリスでの生活を支配してゆく。実は主人公を呪縛し続ける過去の直接・間接の記憶は現在の孤独と疎外感と裏あわせになっているという点が物語を読み解く点で重要である。

主人公の呼び名

ポーランドでの家族の生活を描くときフィリップスはイリーナという名で主人公を呼び、現在を語るときはイレネという名で読んでいる。それはベネダイクトもいうように⁷⁾主人公が過去を回想するときと現在を語るときの区別であり、また彼女のなかの、幸せであった自分と疎外と孤独と仮想の記憶に取り付かれたイギリスでの自己の区分でもある。他方、イレネという現在の主人公を描く時の呼び名は主人公の名をイギリス人が発音できないため歪められた呼び名なのだが、それは象徴的にイギリスでの疎外と孤独を表現しているのである。そしてこの現実からの疎外と孤独こそが彼女の過去への固執と捉われの心理的原因であったと読むこともできよう。

だがこの物語は単に主人公の孤独と疎外感のみを描いているのではない。カリブ出身の男性とのつかの間の恋は、たとえこの時点では実らなかったとしても、孤独と疎外感からの解放の方向を暗示しているとも読めるのである。

作品の骨組み

この物語は主人公の現在と過去が渾然となって描かれているので全体の骨組みをまず整理することからはじめよう。

主人公は37歳になるポーランド出身のユダヤ女性イレーンである。イレーンはドイツのポーランド侵攻の直前、父親の指示で家族を残し一人イギリスに逃れるのだが、それが両親や妹との永遠の別れとなる。イギリスに着いた18歳のイレーンはある工場で働くことになるが、そこで21歳の男レグの求愛を受け、妊娠し、結婚するが子供は流産する。26歳のとき結婚は破綻し、イレーンは鉄道自殺を図るが未遂となり、それ以後、精神を病み病院で10年近くを過ごすこととなる。それから彼女は図書館の子供用の図書の索引作成の仕事に就き、社会復帰を果たしたかに見えるが、それはつかの間でありやがて再び、精神を病み始める。そうしたとき、ルイスというカリブからやってきたばかりの男性と出会い、心の扉を開こうとするが、そのときにはルイスはカリブに帰る決意をすでにしていたのである。そしてイレーンは再び病院に戻る事となる。

このようにしてこの物語は ポーランドでの家族の生活と別離、イギリス人との結婚とその破綻、病院での生活（これは素描されるに過ぎない）と その後の図書館勤めの生活とルイスとの出会いと別れ、という要素から構成されており、フィリップスはそうしたさまざまな要素を現在と過去の回想を巧みに混ぜ合わせながらイレーンの人生の再構築を読者の想像力に委ねているのである。

イレーンのトラウマとユダヤ人収容所体験

昼間は図書館に勤めるイレーンではあるが、下宿の自分の部屋に帰ると再びトラウマに悩まされる。それはポーランドに残した両親と妹ラツケルのその後のユダヤ人収容所での運命である。そのことは直接この小説には触れられていない。だが物語を読み終え、あらためて冒頭のパラグラフを読み直すとそれが彼女のその後の人生の基調音となっていることが理解できるのである。

冒頭のパラグラフ（175）は37歳になるイレーンがアパートのベッドから冬空を眺める描写から始まる。それは「冬は何の約束もせず多くを奪いとっていった。彼女は茶色の葉が、そして死が嫌いだった。イレーンはずっと泣き続けてきた」（175）と続く。そのような心の状態は彼女の悲しげなしぐさに表れ、それは彼女としては自然なことなのであるが、回りの人々の注目を引く。時々、バスの車掌が「そんなに憂鬱そうな顔をしないで」（175）と励ましの言葉をかけ笑みを浮かべるのであるが、そんな時、彼女の心に浮かぶのは「この人は、疲労とアバシーに身をつつみ、何の感情も表すことのできぬ男女や子供たちを見たことがあるのだろうか？

この人は心の舞台上『人間としての尊厳を奪いとられた』最後のドラマを最後まで見とどけたことがあるのだろうか？」（175）という詰問めいた言葉であるが、「でもあの人は善意で言ってくれたのだ」（175）と思いなおすのである。

ここでイレーンが思い浮かべているのはユダヤ人収容所のユダヤ人の姿である。イレーンは残された家族の運命を、大戦後明らかにされたユダヤ人収容所でのユダヤ人体験に重ね合わせているのだ。そのことによってホロコーストは見知らぬ人々の悲惨な体験としてではなく、肉親のものとして彼女の脳裏に宿ることになったのだ。このようにしてフィリップスはホロコーストを現在のものとして生きている主人公を据えているのだ。これをわたしは仮想の記憶と名づけたい。

37歳のイレーンのアパートには本は一冊もない。「本は人を追放も軽蔑もしないという事実にもかかわらず」（173）である。それは何故か、図書館で働く「彼女は昼間本の過多に溺れ、夜は本が無いことに苦しんだ」（174）。にもかかわらず本を手元に置かなかったのは「本によって心が紛らわされないようにしていたのである」（174）。イレーンは家族の運命を忘れないよう自分にいましめていたのであろう。

イレーンにとっての神

イレーンの家族との別離と仮想の記憶は世界についての彼女の感受性を根本から揺るがす。かつて子供のときイレーンは「自分の心を優しい神にゆだねたものであった。それは神が自分の心を慈しみ、傷つけることなく自分のもとに返してくれると信じていたからであった」（178）。しかし、いまやイレーンにはそのような神についての思いはない。アパートの外で降り積もってゆく雪をみながらイレーンはその様子を「神が人間を食べるまえに空の上で塩入れをゆすっているのだ」と「笑いながら想像」（176）するのである。「人間は食べられてもしかたがないだけのことをしてきたのだ」（176）とイレーンは考える。「善良で神にたいして従順なものだけが生き残ることができる」（176）のだ。しかし「その資格のあるものなど一人も知らない」（176）と感じている。イレーンにとって自分もその例外ではない。おなじ食べられるのならそのまま飲み込まれることの方を望んでいるだけなのである。

ここにはイレーンの心のなかでの優しく、人間を慈しむ神の像から怒れる神への変化、すなわち世界観の逆転が見られる。それはナチスに限らずまわりの人間すべてへの不信と裏あわせになっている。彼女の肉親は誰ひとりとして生き残ってはず、彼女はこの世界で一人ぼっちなのだから。

イレーンにとって眠りは恐怖である。なぜなら「心がリラックスし、心の痛みを受け入れる」（176）からである。つまり眠ると家族のことが悪夢となって表れるのであろう。だが、眠らないことも苦痛である。頭が鉄の手錠で締め付けられるように感じるのである。

こうして37歳になるイレーンは孤独と人間不信のなかで仮想の記憶の虜となり「座礁」の危機にある。

イレーンとポーランドの過去

フィリップスはこのような現在を生きるイレーンの人生のここにいたる道筋を作品の各所に散りばめている。その出発点はポーランドにおけるユダヤ人家族である。フィリップスはその時代を主に娘イリーナの視点から描いているが、父方の祖母の視点も重要である。父方の祖母はイリーナに「お前の住んでいる時代にわたしも住みたかったね」(176)と語り、またしばしば「ふくらみつつあるイリーナの胸に骨ばった指をつっこみ、自分は根をもたない木のようなもので男がヒョイとつかんでトラックの後部に放り上げるんだよ、とって笑う」(178)イリーナには理解できない奇妙な癖をもっていた。ここに暗示されているのはユダヤ人の「強制移住」体験であろう。またイリーナの母方の祖母はロシアの片田舎の出身で、その祖父は第一次大戦中の対ドイツ戦で戦死し、それを悲しむあまり祖母もその後を追ったという。社会主義が成立したばかりのソビエトで祖国防衛のために戦死したというユダヤ人の歴史の一端が示唆されているのであろう。

だがイリーナが育った環境は二人の祖母の世代とは異なっていた。有能なビジネスマンだったと想像されるイリーナの父親は雑貨商を営みながら一定の財産を築き、二人の娘に愛情を注ぎながら、大学にやるつもりで大切に育てていたのである。美しい母親は世の中の動きこそわからなかったが、子供に母性的情愛を注ぎ大切に育てていた。だからイリーナと妹のラッケルは父母によってユダヤ人への偏見や差別から守られ、イリーナは本の世界に我を忘れ、ラッケルは医者になるべく将来の夢をもって育ってきたのである。このような守られた環境の故に幼いイリーナはナイーブで楽天的な人生観をもち、上記の祖母の体験に違和感を感じたのであろう。

だが、父親はそれとは違った人生を生きてきたと想像される。何故なら父親はパレスチナに祖国の建設をめざすシオニズムに共感していたとされているからである。シオニズムはキリスト教社会に同化を目指したユダヤ人の排除をめざす「反ユダヤ主義」⁸⁾の台頭へのユダヤ人のひとつの選択であったからだ。そして時代はヒットラーの権力奪取とナチスドイツによるチェコスロバキアのドイツへの合併の直後であることが示唆され、父親はヨーロッパの情勢を外国語の知識を駆使しラジオによって敏感に捉え、迫り来る大戦とユダヤ人にとっての危機を察知していたことがわかるのである。そしてそのような動向はポーランドにおいても静かに進行し、やがて家族の存在そのものを揺るがす事態にまでなる。

祖母が亡くなった日、学校から店に帰ってきたイリーナはお客が頼んだ商品を受け取り「お

金をカウンターに放り投げ、不機嫌な表情でニコリとし、店をでてゆく」(179)のを見る。父親はそんなとき娘と目をあわさず、何事もなかったかのように必死に気にしない風を装っていて、イリーナは父親に声をかけられなかったのである。

だがユダヤ人への偏見の被害者は父親だけではない。それは姉妹の通う学校でも感じられるようになり、ラッセルは「その問題」を家庭で相談しようとしたこともあった。それを彼女がやめたのは母親の「疲れ果てた諦め」(191)の表情によるものであった。やがて父親はある朝、朝食のテーブルで娘たちを大学にはやらないと宣言する。「わたしの娘は決してゲットー・ベンチに座らせないぞ」(191)といったのである。大学にまでユダヤ人差別がしのびこんでいたのであり、誇り高い父親はそれにささやかな抗議を試みたのである。ユダヤ人をめぐる厳しい状況は家族のなかに波紋を投じる。母親が人生に受動的な性質であるのにたいし、父親は誇りたかくそれに抗してゆこうとし、それが両親の意見の対立となり、イリーナを心配させるのである。

そして反ユダヤ主義の広がりがついに家族を乱暴に襲う。ラッセルが学校で乱暴され怪我を負ったのである。こうして事態を受けて一家はイギリスへの移住を決意する。だが、努力によって築きあげてきた財産に固執し、店を売り払った後に移住しようとする父親と、家族の身の安全を第一に考えただちにポーランドを離れようとする母親との間の意見の対立が一家を揺るがす。その結果、怪我のあと臥せってしまったラッセルと両親を残しイリーナは一団の子供たちとともにポーランドを後にし、ウィーンを經由しイギリスのロンドンに向かうのである。だが、父親の財産への固執が致命的な判断ミスとなる。イリーナがイギリスに発った直後、ポーランドはナチスドイツによる侵攻を受け、それが第二次大戦の口火となったのである。そして残された家族は収容所に送られたのであろう。イリーナの家族への手紙に何の反応もなかったのである。

イギリスでのイリーナ（レッグとの結婚とその破綻）

言葉もわからず、なんの身寄りもない異国イギリス、しかもユダヤ人に非寛容な国に一人で「なまり以外のすべてを失った難民」(212)となった18歳のイレーンは、福祉事務所のケース・ワーカー、マッケンジーの世話で、ある工場で働き始める。だが、教育があり、繊細な感受性をもち内気なイレーンは粗野で衛生観念のない工場の娘たちとは心を通わすことができず、下宿に帰ると泣き暮らす孤独な生活を送る。そんなときイレーンにレッグという21歳の同じ工場に働く青年のアプローチを受ける。「今夜何をしているんだい？」と聞かれイレーンは心のなかで「泣きながら眠るのよ・・・わたしは見捨てられたの。あなたはわたしを望んではいない。からかっているだけなのよ・・・ひどいし打ちをしたり、不親切な態度をとらない

で。」(184)と心のなかで思う。このように自分への自信に欠けた気弱な側面がイレーンにはある。だがそれが彼女のすべてではない。イレーンは「18歳を超えたのだから・・・ドアは自分で開けなくてはいけない」と決断し、「今夜は予定はないは」と答える。その晩デートの約束をしたイレーンは「明らかに重大ことが起きた。そしてそれは自分の判断で起きたことだ。自分がそう決めたのだ。誰の意見で動いたわけでもない」(185)と思う。フィリップスはそれを「内気さの壁を打ち破ろうとする最初の試みだった」(185)と述べている。イレーン自身、そのままでは「内気さは彼女の体に巻きつき、煉瓦とモルタルの死装束となってしまう」(185)と恐れていたのである。

こうしてイレーンはレッグと付き合うことになるのだが、それは孤独と孤立の海のなかで溺れそうな状況のもとで彼女が見つけた唯一の助け船であったからだ。そして、そこに本当の愛情はなかった。イレーンが体を許したのは彼女にとってレッグが「彼女が知っている最悪の連中のなかでは最もましな男性であり」「彼女の体に関心を示した最初の男性」(188)だからであった。また彼女には自分が確かに生きているという証明が必要であり、レッグとの関係がそれを与えてくれたからでもあった。イレーンがレッグについて知っていたことといえば彼が家庭と仕事について平凡な夢をもっているということぐらいであった。そしてそれにたいし、彼女は共感するふりしかできなかつた。それゆえ、彼女はグレッグとのセックスに「積極的にかわるというよりもがまんするであろうことを知っていた」(189)のである。初めての経験のあと、「グレッグの自分への関心が心からのものだろうか」(190)と心配し「たぶんそうではないだろう」(190)と感ずるのであった。初めての行為の後彼女の気持ちを気遣う男の役を演じるレッグにたいし、イレーンは「それは彼女を理解しているという振りを演じるよりは簡単」(190)だと皮肉な視点で彼を見ている。「レッグの限られた知性を考えた場合、女性の神経の上を騒々しく踏み歩く男の役を演じるほうが悲劇役者を気取って笑いものになるよりましだ」(190)と思うのである。この二人の関係はイレーンのイギリスでの不幸な境遇がなければ成立し得なかつたことがここでもわかる。知性や感受性においてレッグはイレーンの相手ではなかつたのである。

イレーンはレッグとの間に生まれた関係について「女になったというよりもはや子供ではない」と感じ、「自分は欲望についての初歩的な講義を受け、思ったとおり、欲望はあるものに捉われることより心地よいことを発見した」(190)と述べている。ここでイレーンが欲望と比較しているのは自分の両親や妹への感情である。それが奪われたときの悲しみの深さを体験しているイレーンには「そのような感情を再びもつ強さをもはやもてないのではという恐れをもっていたのである」(190)。

このようにしてイレーンは愛するものを奪われた苦痛ゆえに再び人を愛することができず、その代用品をレッグとの関係に求めたのである。だが、そのように中途半端な選択は結局彼女

の幸せにはならなかった。レグはイレーンが感じていたように本当の愛情を彼女にもっていただけではなく、「彼女と遊んでいる」うちに彼女の妊娠という罠に捕らえられ、結婚という檻に入れられたと感じたのである。妊娠したイレーンにとっても事情はそう変わっていたわけではない。大きなおなかをかかえたイレーンもそれが夢であればと思っていたのである。おまけにレグは戦争中に戦争を忌避したため戦後「臆病者」といわれ、後ろ指を指される存在になっていた。そして人が変わったように彼女にその不満をぶつけ、子供が流産で亡くなると彼女を顧みなかったのだ。こうしてイレーンは鉄道自殺を試みる。イレーンが26歳のときであった。その後彼女は精神科の病院で10年近くを過ごすことになったのである。

精神科病院での10年

イレーンは現在の時点に立って「自分は二度見捨てられた」(180)と振り返り、家族との別離とレグとの結婚の破綻が彼女に残した精神的ダメージの大きさを語っている。だがそのダメージとはどのような性格のものであったのか？そして10年近くにもわたる精神科病院での療養生活とは何であったのか？実は彼女に最も必要であったのは彼女の心のなかに渦巻く悪夢、一人でワルシャワからウィーンへ、そしてイギリスに向かう悪夢のような旅と残された家族たちの恐らくは悲惨な運命に悩まされる悪夢を理解してくれる人だったのではないか？

だが、病院での看護婦たちによる心のこもらぬ愛情や友情の素振りは彼女の心の悪夢に触れることがなかったのである。ここに彼女がそうした素振りを嫌うようになり、「誰にも体を触れさせなかった」(200)原因を見ることができよう。だが10年近くの療養生活の末に彼女は「そのようなイメージが過去の物となった振りをする技術を完成させた。彼女は金切り声を上げることをやめ、尋ねられたことに返事するようになったのだ」(200)。そして病院からでて図書館で働いてはどうかといわれるまでになったのである。

だがほぼ12ヶ月を経て、下宿でたった一人となり誰にも自分の正気を装う必要がない状況のもとで「彼女は泣き、死を恐れた。眠ることは辛かった。そして再び鉄の手錠に頭が締め付けられるのを感じるのであった。」(201)イレーンを受け入れた下宿の管理人のモリはそうしたイレーンの挙動を不信に思い病院に報告したのであろう。またこうして眠られぬ夜を過ごすイレーンは、図書館の仕事にも遅れがちとなり、上司のローレンス氏に目をつけられることになる。

こう読んでくると、イレーンの精神的な病の「再発」は実は「再発」ではなかったと考えるべきであろう。というのは病院においても本当の治療に基づく「回復」があったわけではなく、病を覆い隠す技術を彼女が獲得したというに過ぎなかったのだ。イレーンの精神的なトラウマである家族との別離、孤独と不安に満ちた旅、その後の家族の収容所での死の想像、レグに見捨てられたこと、などの問題は一人彼女の心のなかに巣食ったままで癒されることがなかつ

たからである。イレーンが必要としていたのは表面的な愛の場としての病院ではなく、彼女を真に理解し、愛してくれる人だったのではなからうか？

イレーンとルイス

こうした状況のなかでイレーンの前に現れたのがルイスであった。ルイスはこの作品のなかで唯一イレーンが自分を理解してもらえるかもしれないと望みをかける人物である。それは何故か？それはルイスのどのようなありようによ来するのか？そういう観点からルイスの描き方を分析してみよう。

ルイスはカリブからやってきて10日ばかりにしかならない黒人であった。だがその短い期間の間にもルイスはイギリスにやってきたカリブの黒人が被るさまざまな差別を体験した。仕事を断られ続け、「どうして黒人はイギリス社会の最下層で頭がくらくらするような思いをしなくてはならないのか？」(194)と思いを始めていた。苦境に陥った新参者の彼を同じカリブ出身の黒人はバカにするばかりであった。またクラブでルイスを誘惑したイギリス人の女性は「黒人にしてはハンサムね」(194)と黒人への差別意識を隠さない。彼女の興味は彼の人柄にあったのではなく肌の色の違いによる性的アピールでしかなかったのだ。そうした体験に疲労と屈辱を感じながらもルイスは内面の誇りを失わなかった。

ルイスから見ればイギリスの社会の下層で軽蔑されながら生き延びて行く自分の未来の生活は「義理の母親から愛情を求める子供のよう」(216)に卑屈な生き方なのである。そしてルイスにはイギリス社会に黒人がしだいに適応してゆく姿は「(義理の)母の愛情が示されるまで」待っているのと同じだと考える。そしてその間に何が起きるのか？ルイスはそれを「自分の指がしなやかさを失い、自分の顔が工場労働者の顔にゆがめられてゆく」という表現で言い表している。すなわち、それはカリブでの生活に根ざした自分のアイデンティティ、あるいはのびやかな自分らしさの喪失だと捉えているのだ。そして「(新たな土地に根を下ろすことに)失敗した旅人として島に戻るほうが、不在の英雄として誉めそやされながらも精神的に貧しい生活を送るよりはましだ」(197)と心に思う。故郷で成功者として噂されその実、卑屈で自分を失った生き方をイギリスでするより、たとえ失敗者の烙印を押されようとも、故郷で自分が誇りをもって生きることのほうを選ぼうとするのである。

だがイレーンがルイスを初めて見たとき、そのような背景を知るよしもなかった。ルイスは憔悴した顔つきで図書館に暖を取りにやってきて、雪の降る外を眺め、時折彼女をじっと見つめていたのであった。彼女もルイスの存在が気になるのだが、彼と視線があわなかったことでホッとしていた。ルイスの存在は図書館の他の人々の「好奇心と敵意の入り混じった」(197)まなざしを集める。ローレンス氏はそのことに気づきルイスを追い出そうとする。イレーンは

ルイスに不快な思いをさせるのはかわいそうに思い、彼に近づき「通りの角のパブにいったらどうですか？」(198)と話しかけようとする、「ルイスは突然彼女の方を振り向き、彼の置かれた状況からは想像できない自信に満ちたまなざしを彼女に向け」(198)彼女をくちごもらせるのである。

イレーンがルイスに見た哀れな外見はバスの運転手がイレーンに見たものと同じである。だがルイスにはそれを裏切る「自信」に満ちた内面があった。恐らくイレーンがルイスに興味を感じ、カフェを訪れた深層の原因であろう。そしてイレーンが遭遇するのは「君はきっとここにやってくると思っていた」(198)という自信に満ちたルイスの言葉であった。だがイレーンは「思った通り彼は孤独なのだ。しかし単なる友達としての気持ちしかないのに気を惹こうとするのはかわいそうだ」(198)と用件が終わればすぐそこを出ようと心に思う。だがイレーンは黒人の男性と白人の女性の組み合わせがパブの白人たちの露骨なまなざしの対象となっていることにも平然とした態度を取るルイスを見て「この人はみんなが見つめているのに気づいているのだろうか？」(199)と思う。ルイスは彼女は図書館での出来事について「わたしはかまわなないんだけど問題はわたしの気持ちじゃないってことを知ってほしかったの」(199)と自分がやってきた理由を説明し立ち去ろうとする。しかしルイスは彼女を次の日の夜の映画に誘い、イレーンはそれを断りきれない。何故なのか？大きなためらいのなかでイレーンは、もしかしたら「あの男性だけは解ってくれるかもしれない」(200)と思ったからであった。イギリスで蔑みの視線をさりげなく受け流すルイスにイレーンは自分にはない強さや自信を見たのである。それは病院から退院したものの下宿で泣き暮らし「死を恐れ、眠るのがつらい」状況になり、「鉄の手錠に頭を締め付けられる」(201)ように再び感じていたイレーンに助けの綱を投げかけてくれるかも知れない最後の機会だったのである。

最初で最後のデートでの二人のやりとりはきわめて微妙に描かれている。ルイスはイレーンにたいして積極的であるが（映画の間中彼女の手を握りしめる、テムズ河の畔で彼女のコートのなかに手をいれ彼女を抱く）中途半端である（キスするのをやめる）。イレーンは最初、警戒心を解かないが（映画の間中頭のスカースを取らない）、やがて積極的になる（どうして彼がキスするのをやめたのだろうかと思い、自分から軽くキスをする）。ルイスは彼女の両親や彼女のなまり（ポーランドからきたユダヤ人）について聞く。だがその質問に彼女は笑って答えない。そして彼に軽くキスをする。こうしたかみあわないやりとりのなかでルイスはイレーンの態度が積極的になるのを見て、「明日、僕はもう一度海をわたるんだ。そのことを君に言っておくべきだった」(214)という。彼女は笑い続けるが心のなかでは「心臓が大きく鼓動するのを感じた」(214)のである。しばらくしてイレーンは「あなたはわたしを置き去りにするのね」(215)と彼の言葉をいま聞いたばかりのように確認し、お祝いの印としてルイスを自分の下宿に招待する。最後の夜を一人で過ごすのは耐えられなかったのである。

ではルイスはイレーンをどう見ていたのか？ルイスは「イレーンが眠っているときには実際の年齢よりは老けて見える女だと思った。しかし、彼女に惹かれる気持ちは消えてゆかなかった」(216)のである。しかしルイスはイレーンと会ったときすでに故郷のカリブの島に帰る決心をし、「どのようにして前進し、自分の生活を取り戻そうかという問題」(216)と格闘していたのである。そして「ルイスはイレーンを見つめ、ため息をついた。自分がこの女性から何を求めているのかわからなかったのだ。話し相手なのか？友達なのか？イレーンはルイスの体に触れてきたが、彼は」(216)彼女のニーズに答えようとはしなかった。「彼女が厳しい忠誠心を彼に示し、そしてそれを彼にも要求し、自分がそれに答えられないという事態を予想したのだ」(216)。そして「今はダメなんだ。すまない。」(216)と心のなかでつぶやく。

イレーンは「わたしは過去を思い出したくないの。返事のこない手紙を書き続けてきたのだから。わかる？わたしの心臓をなめてみたらあなたの舌に塩の味が残るは、からくて苦い塩の味がね。最初のデートのためにお化粧する娘（わたしじゃないのよ）を思い出すの」(217)と独り言でもいうようにルイスに語りかける。

このようにしてイレーンはルイスに今まで人には語ってこなかった自分の心のうちを語るのであるが、それは独り言にしかならなかったのである。

こうしてイレーンとルイスはお互いに強く惹かれあうものをもちながらも別の人生を歩んでゆく。イレーンは病院へと、ルイスは故郷へと。

イレーンが切実に必要としていたのは自分の心のトラウマを理解し受け止めてくれる相手であった。ルイスはそれに答えることができたかもしれなかった。しかし、ルイスには今の彼女の問題にかかわりあうだけの余裕がなかった。彼は祖国に帰り自分の人生を立て直さねばならなかったのである。いわば二人の人生上のアジェンダ（課題）がこの時点では食い違っていたのである。こうしてルイスはイレーンを救うことができなかった。だがせめてもの救いはルイスの登場によってイレーンが孤独と疎外感、それによる過去の呪縛から逃れるために何を必要としていたのかが浮き彫りにされたという点である。

だがフィリップスの二人の関係についてのこのような中途半端な設定は何を意味するのであろうか？それは恐らくフィリップスがユダヤ人と黒人の関係の社会的関係の複雑性を考慮した結果であろうと理解する。両者はともに迫害の歴史をもっているのであるが、現実には対立の側面も持っている。それは自民族中心主義的な流れがどちらにもあるからであり、そしてそれは近年ますます大きくなってきている。他方、両者の共通体験を基礎に社会的連体を主張する流れも双方にある。そうした複雑な関係のなかで、そうしたなかで二人の関係を安易に成立させてしまえば両者の対立を意識する読者の反発を買うのは必死である。この作品が出たときにユダヤの民族主義的批評家はそもそも黒人のフィリップスがユダヤ人体験を描くということ自体にも異議を唱えたのである。そうしたなかでフィリップスはイレーンに最も近くにまで接近

した男性としてカリブ出身の強く、誇り高いルイスを設定しつつ、この時点でのわかれを設定するという道を選択したのである。

とはいえ、ルイスの形象も二人の関係を説得的に描くに十分とはいえない。その意味でも二人が結びつくという設定は安易で説得性を欠くという批判を受けたであろう。その意味でもこの時点ではこのような設定は、アンティ・クライマックスに結果するとはいえ自然だったと考える。

注

- 1) “Higher Ground”, *Higher Ground*, (London: Viking, 1989; Penguin, 1990). なお本論のテキストとしてはFirst Vintage Edition, 1995.を用いた。テキストからの比較的長い引用についてはそのページ数を引用文の後に記した。
- 2) *Higher Ground*, (London: Viking, 1989; Penguin, 1990).
- 3) *The Nature of Blood*, (London: Faber and Faber, 1997).
- 4) *The European Tribe*, (London: Faber and Faber, 1987; London: Picador, 1992).
- 5) *Ibid.*, pp. 52-53.
- 6) *ibid.*, p. 67.
- 7) Bénédicte Ledent, *Caryl Phillips*, Manchester University Press, pp.59-60.
- 8) 『ウィーンの反ユダヤ主義』

Jewish Diaspora and Imaginative Memory: Caryl Phillips's 'Higher Ground'

This paper will discuss Caryl Phillips's 'Higher Ground', the third novella in his *Higher Ground* in 1990. This paper will give the background not only for his interest in Jewish experiences, but also for this work itself which depicts the life of a Jewish woman in exile in Britain after World War II. This paper will also provide comparative analysis of the black diaspora depicted in the first novella of *Higher Ground* and this work. This comparison will reveal the unique quality of this work, which depends for its effect upon obsessive past memory about her lost family, which would be more traumatic because of the imaginative quality of her memory about her parent's and her sister's death in a Nazi concentration camp which his later work, *Nature of Blood* would give full account of.

This paper will also discuss the other side of the protagonist's psychological obsession about her past: her desolate life in Britain where she could find no one who would really be interested in her experience under the Nazi regime and understand it. This paper will then analyze what was the nature of her marriage with the man and how and why it failed, leaving her no other choice but seek her own death. This paper will also analyze why her 10 years' life in the hospital did not really cure her of her psychological illness but merely equipped her with the technique to pretend her recovery from it. But her encounter with the real life in Britain merely compels her to be faced with her inner trauma again and almost make her 'shipwrecked'. It was exactly at this time that she meets with a black man fresh from the Caribbean and becomes interested in him. This paper will analyze the nature of her attachment to him and discuss the reasons why. This paper will also discuss why their relationship did not come to fruition, but left her alone again with him going back to his home land again. I will discuss the authorial intention behind the way this work comes to a frustrated end.

(KATO, Tsunehiko 本学部教授)